

# 富山型デイサービスにおける障害のある子どもたちの 問題行動に関する調査研究

栗林 睦美\*・阿部 美穂子

## Implications of Research on Problem Behavior of Children with Disabilities in Toyama Type Day Service

Mutsumi KURIBAYASHI・Mihoko ABE

### 摘 要

本研究では、富山型デイサービスにおける、障害のある子どもたちの問題行動の現状を明らかにすることを目的に、アンケート調査を実施した。対象は、富山県内の富山型デイサービス62か所の事業主、及びその職員である。調査の結果、障害のある子どもが利用している事業所は36か所(58%)で、その中の24か所(67%)が、障害のある子どもたちに問題行動がみられると回答した。また、2008年度に富山型デイサービスを利用した障害のある子ども419名のうち、40%(168名)に問題行動がみられ、その中でも、特別支援学校中学部在籍児において、問題行動のある子どもの数がそうでない子どもの数より統計的に有意に多いことが分かった。そこで、さらに問題行動を起こす子どもの利用実態や、その問題行動の内容、職員の対応などを明らかにするため、問題行動があると答えた事業所1か所あたり、特に対応に困る障害のある子どもを2名までを対象に、詳細なアンケート調査を依頼したところ、子ども37名分について回答を得た。その結果、特に対応に困る子どもたちは、長期休業中や課業中を問わず、多様な時間数で日常的にデイサービスを利用していること、利用時間中は決まった活動プランがなく職員が付いて活動していること、一人で過ごす場合は自己刺激遊びが多いことが分かった。また、職員が特に対応に困る行動は1「他人の体をつねったり、叩いたりして傷つける」、2「こだわりがある」、3「排泄や食事などの身辺処理面での意思疎通に困難がある」、「突然どこかへ飛び出す」の順で多かった。さらに、最も対応に困る行動が1日に4回以上起きている子どもたちが半数近くおり、回答した職員の7割以上がその行動に対して困惑していることが明らかになった。以上のことから、障害のある子どもが富山型デイサービスを利用する際の問題行動は、看過できない課題と考えられ、富山型デイサービスの特質に即した問題行動への対応方法を早急に検討する必要性が示唆された。

**キーワード：**富山型デイサービス 問題行動 障害児

**keywords：**Toyama Type Day Service, Problem Behavior, Children with Disabilities

### I はじめに

近年、特別支援学校の障害のある子どもたちの余暇支援としてデイサービスの利用が増えている。特に、富山県においては、主に富山型デイサービス(富山県民間デイサービス連絡協議会、2003)が利用されている。

富山型デイサービスとは、地域に住む高齢者から子どもまで障害の有無にかかわらず受け入れるという小規模で多機能が特徴の民間デイサービスである。「家庭的」であること(平野、2005)がサービスの特徴にもなっており、民家を事業所として使う場合が大多数である。富山県で、惣万らが1993年に全国で初めて、このタイプの民間のデイサービス事業

所「このゆびとーまれ」を開設したことから、富山型デイサービスと言うようになり(惣万、2002)、年々増加傾向にある。その利便性から利用する障害のある子どもたちも増え、今では富山型デイサービスは、障害のある子どもの余暇支援において欠くことができない受け入れ場所になってきている。それに伴い、特別支援学校では、富山型デイサービス事業所との連絡会を設け、利用する子どもの実態について情報交換をするようになった。その中で、最近、事業所側から利用時における児童生徒の行動上の問題が検討課題に挙げられるようになってきている。

障害のある子どもが富山型デイサービスを活用して、充実した余暇活動ができるようになるためには、デイサービスの中で起きている問題行動の改善・低減に向けた具体的な対応策が求められる。そのため

\*富山大学大学院教育学研究科学校教育専修

には、まず、富山型デイサービスにおける障害のある子どもの問題行動の現状を十分把握する必要がある。障害のある子どもの問題行動に関する調査研究は、これまでに、知的障害養護学校の教師に対して行ったもの（小笠原・守屋，2005）や知的障害養護学校、特殊学級在籍児童の家庭生活に関して母親に行ったもの（藤原・平澤，2003）がある。しかし、デイサービスにおける障害のある子どもの問題行動に関する調査は見あたらない。特に、富山型デイサービスのように、障害児に限らず多種多様な利用者が利用する複合型のデイサービス事業所において、障害のある子どもたちがどのように過ごしているかについては、データがほとんどなく、問題行動の現状も明らかにされていない。

そこで本研究では、富山型デイサービスにおける障害のある子どもの問題行動の現状を探ることを目的に、富山県内の富山型デイサービス事業所の事業主、及び職員を対象に「障害のある子どものデイサービスにおける問題行動に関するアンケート調査」を実施する。本研究において、問題行動とは「デイサービス職員が対応に困る行動」と定義する。調査に当たっては、問題行動は個人と環境との相互作用の一種状態という観点から、問題行動のある子どもたちの富山型デイサービスでの過ごし方、及び、問題行動の内容や生起状況、富山型デイサービス職員の対応方法や問題行動に対する困惑度などについて情報を収集する。得られた情報から、富山型デイサービスでみられる問題行動の特質やそれが起こっている要因について分析し、余暇支援の重要な資源の1つである富山型デイサービスにおける、障害のある子どもの問題行動の改善に向けた課題を明らかにする。

## II 調査方法

### 1. 調査の内容・項目の選定

調査はA票、B票の2種類の調査用紙で構成する（表1、表2）。

A票では、富山型デイサービス事業所の事業主に対して、2008年度の障害のある子どもたちの施設利用の有無を尋ね、利用がある場合は、その人数と、その中の問題行動（対応に困る行動）を起こす子どもの数を所属別に把握する。

B票は、A票において、障害のある子どもが利用し、且つ問題行動があると回答した場合にのみ、各

表1 A票の質問項目の概要

1. デイサービス事業所名
2. 障害のある子どもたちの施設利用の有無
3. 施設を利用している障害のある子どもの数
  - 1) 特別支援学校（小・中・高）
  - 2) 特別支援学級（小・中）
  - 3) その他
4. 問題行動（対応に困る行動）を起こす子どもの数
  - 1) 特別支援学校（小・中・高）
  - 2) 特別支援学級（小・中）
  - 3) その他

表2 B票の質問項目の概要

1. 問題行動を起こす子ども自身に関すること
  - 1) 性別
  - 2) 年齢
  - 3) 障害名
  - 4) デイサービスの利用形態と頻度
  - 5) 子ども用の決まった活動プランの有無
  - 6) デイサービスでの利用時間の過ごし方
2. 問題行動（対応に困る行動）に関すること
  - 1) 対応に困る行動（15の選択肢及びその他から選択）
  - 2) 上記のうち、最も対応に困る行動（1つ）
  - 3) 最も対応に困る行動が起きる頻度
  - 4) 最も対応に困る行動が起きる状況
  - 5) 最も対応に困る行動に対する職員の対応方法
  - 6) 最も対応に困る行動に対する職員の困惑度

表3 職員が対応に困る行動の選択肢

	行 動 形 態
1	排泄や食事など身辺処理面で意思疎通に困難がある
2	自分で自分の体を傷つけたり叩いたりする
3	他人の体をつねったり、叩いたりして傷つける
4	物を投げたり壊したりする
5	落ち着かない
6	大きな声、変な声を出す
7	手をひらひらさせる、飛び跳ねるなど同じ動作を反復する
8	こだわりがある（水、動植物、おもちゃなどに特別な興味）
9	人前で体の一部を露出したり裸になったりする
10	突然どこかへ、飛び出す
11	変な物を食べる
12	かんしゃくを起こしやすい
13	唾、排泄物などで遊ぶ
14	パニックを起こす
15	他の人と交流しない
16	その他

事業所で特に対応に困る子ども2名までについて記入を求める。記入は、対象となる子どもに日頃からよくかかわっている職員が行うように依頼した。B票の内容は、①問題行動を起こす子ども自身に関すること、②問題行動に関することの2項目で構成する。②の項目においては、対応に困る行動の選択肢として、あらかじめ表3に示す15の行動を挙げた。選択肢は、小澤ら(1999)の調査研究を参考に作成した。また、質問紙の作成にあたっては、実際に富山型デイサービス事業を行っている事業主1名に予備調査を行い、設問の分かりやすさ、記入しやすさなどの妥当性を検討し、設問の表現や選択肢に修正を加えた。設問の回答は選択方式、あるいは自由記述方式で求めた。

## 2. 調査の実施

### (1) 調査対象

富山県の各市町村のホームページより障害児受け入れ可となっている富山型デイサービス事業所62か所を対象とした。

### (2) 調査手続き

調査を実施するにあたって、富山ケアネットワーク<sup>1)</sup>の協力を得て定例会で会員に直接配布し、それ以外のデイサービス事業所には郵送にて配布した。記入期間は2週間とし、回収は郵送による方法を取った。期日を過ぎても返答のない事業所に対して電話連絡をし、障害のある子どもの利用の有無について確認を取った。調査用紙と併せて、「障害のある子どもたちの問題行動及び現状を把握し、デイサービスでのよりよい支援を検討する」という調査の趣旨と「プライバシーの守秘と調査用紙記入についてのお願い」の文書を付けた。

実施時期は平成21年3月～4月とした。

## Ⅲ 調査結果

### 1. 回収状況

A票については、郵送で38事業所、電話で24事業所の計62事業所の代表者から回答を得た。回収率は100%である。

B票については、A票で障害のある子どもが利用していると回答した36事業所の内、問題行動があると答えた24事業所から37名分の回答を得た。

## 2. 調査結果の集計及び分析方法

調査結果は、原則として質問紙の設問ごとに単純集計によって分析した。設問によっては平均や標準偏差を算出した。また、問題行動の有無の回答については、Java Script-STAR version 4.4.3jを使用し、校種別に問題行動のある群とない群とで有意差検定を行った。さらに、問題行動が起きる状況、及び、職員の対応の2つの回答については、第1筆者を含め、特別支援教育を専攻する大学院生4名でKJ法を使い、自由記述で示された回答を全員の意見が一致するまで検討を重ねてカテゴリー化して分析した。

## 3. 障害のある子どもの富山型デイサービス利用とその問題行動の有無

62事業所中、障害のある子どもの利用があると答えたのは36事業所(58%)、利用がないと答えたのは26事業所(42%)だった。さらに、障害のある子どもの利用があると回答した36事業所の内、利用している子どもに「問題行動がある」と回答した事業所が24(67%)、「問題行動がない」と答えた事業所が9(25%)無記入が3(8%)だった。(図1)

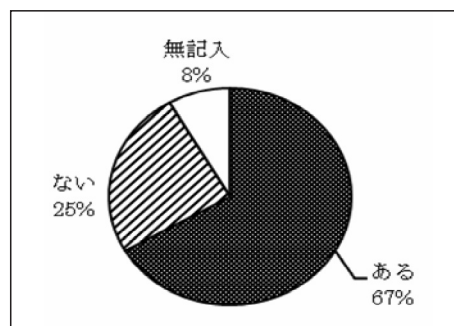


図1 富山型デイサービスにおける、障害のある子どもの問題行動の有無

## 4. 富山型デイサービスを利用している、問題行動のある子どもの所属別比較

障害のある子どもの利用があると答えた36事業所のうち、回答に不備があった3事業所を除いた33施設による回答を集計した。

2008年度の1年間で富山型デイサービスにおける障害のある子どもの利用者数(同事業所を何度利用しても1名とみなす)は、419名で、その所属別内訳は、特別支援学校(小学部)195名(47%)、特別支援学校(中学部)80名(19%)、特別支援学校(高等部)76名(18%)、特別支援学級(小学校)



43名（10％），特別支援学級（中学校）7名（2％），その他（未就学児）18名（4％）だった（図2）。2008年度富山県の特別支援学校在籍児童生徒総数は1174名，特別支援学級在籍児童生徒総数は833名であり，特別支援学校（小学部，中学部，高等部）の利用者は特別支援学校児童生徒総数の30％，特別支援学級（小学校，中学校）の利用者は特別支援学級児童総生徒総数の6％にあたる。

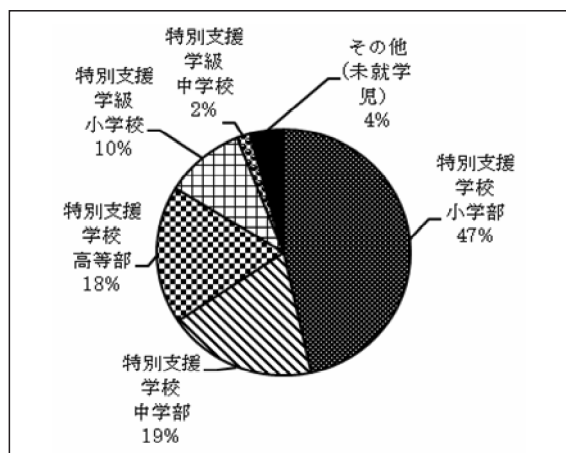


図2 富山型デイサービスを利用している障害のある子どもの所属別内訳

上記419名のうち，問題行動のある子どもは168名で，利用した障害のある子ども全体における，問題行動のある子どもの割合は約40％だった。その所属別内訳は，特別支援学校小学部65名（39％），特別支援学校中学部42名（25％），特別支援学校高等部31名（18％），小学校特別支援学級16名（10％），中学校特別支援学級5名（3％），その他（未就学児）9名（5％）であった（図3）。

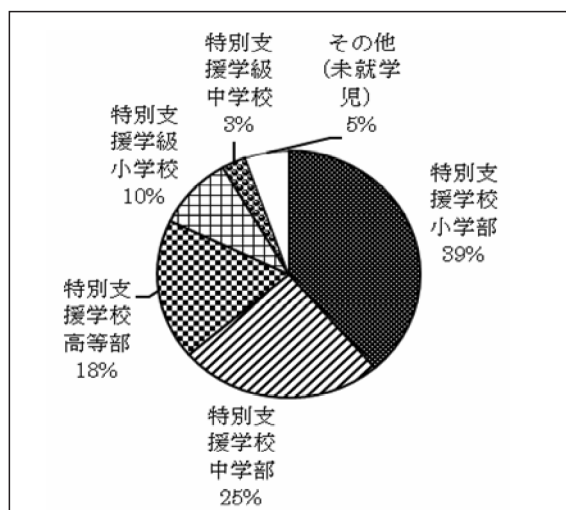


図3 問題行動のある子どもの所属別内訳

各所属校種別に問題行動のある群とない群で有意な差がみられるかどうかを検討するため，カイ自乗検定を実施した。その結果，特別支援学校小学部在籍では，問題行動のある子どもの人数と問題行動のない子どもの人数の間に有意差（ $p<0.01$ ）がみられ，問題行動がない子どもが有意に多かった。特別支援学校中学部在籍でも，両者において有意差（ $p<0.01$ ）がみられたが，小学部とは逆に，問題行動がある子どもが有意に多かった。特別支援学校高等部在籍，小学校特別支援学級在籍では，それぞれ，問題行動のある子どもの人数と問題行動のない子どもの人数の間に有意差がみられなかった。中学校特別支援学級在籍では，両者の差に有意傾向（ $p<0.1$ ）がみられ，問題行動がある子どもが有意に多い傾向となった。

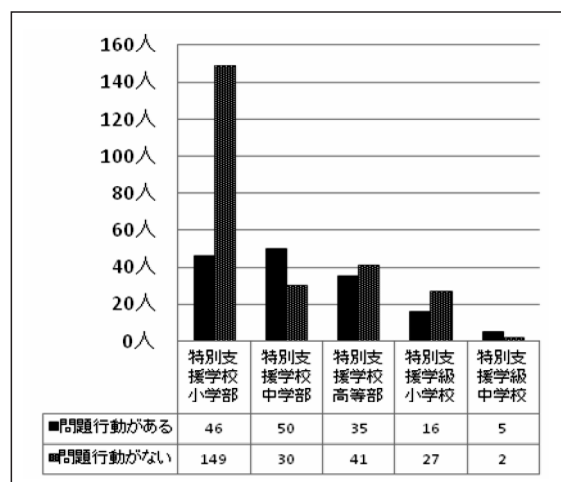


図4 所属校種ごとの問題行動のある群とない群の人数比較

## 5. 特に対応に困る問題行動のある子ども自身について

B票で得られた，特に対応に困る問題行動のある子ども37名分の子ども自身の属性や富山型デイサービスの利用状況などに関する回答について，以下に詳細を述べる。

### (1) 性別

デイサービスにおいて職員が特に対応に困る行動がある障害のある子ども37名の内，男子33名（89％），女子は4名（11％）だった。

### (2) 年齢

年齢別の人数について図5に示す。多い順に，7歳が7名，11歳が6名，続いて12歳が4名であった。小学校低学年（7,8歳），同高学年（

(11, 12歳) がそれぞれ10人で、幼児期、小学校中学年期の各3人、中学生期、高校生期の各5人よりも多くなっている。

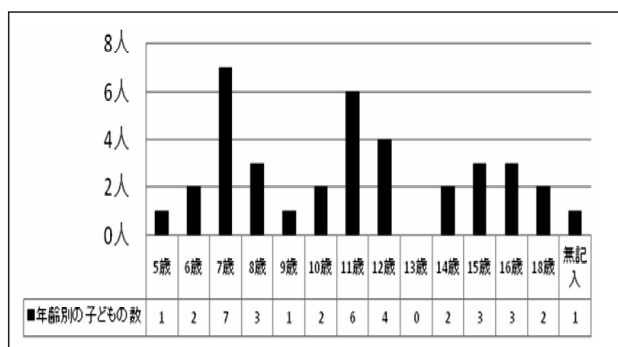


図5 年齢別に見た、特に対応に困る問題行動のある子ども的人数

### (3) 障害名

障害種別の人数を図6に示す。知的障害11名(30%) 自閉症11名(30%)、自閉症を併せ有する知的障害4名(11%)、高機能自閉症2名(5%)、重複障害2名(5%)、注意欠陥／多動性障害(AD/HD)1名(3%)、その他3名(8%)、無記入3名(8%)だった。発達障害と知的障害の子どもたちを合わせると約8割を占めた。

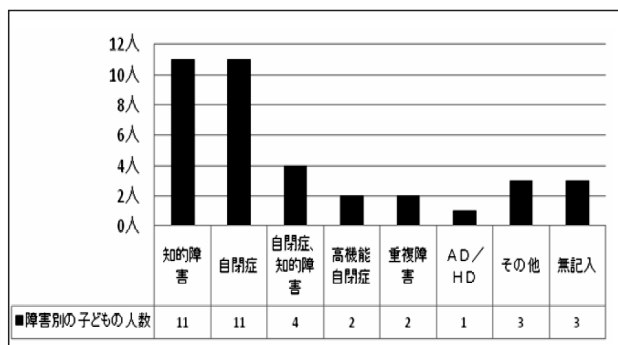


図6 障害別にみた特に対応に困る問題行動のある子ども的人数

### (4) 富山型デイサービスの利用形態

#### 1) 長期休業日以外利用の有無と利用する曜日

長期休業日以外利用は37名中利用なし1名(3%)、利用ありが36(97%)名だった。

利用していると答えた36名の内、無記入2名を除いた34名について複数回答で得た利用方法を図7に示す。「定期的に平日利用」11名、「定期的に土曜日利用」5名、「定期的に日曜日利用」1名、「不定期に平日利用」12名、「不定期に土曜日利用」14名、「不定期に日曜日利用」5名だった。定期的に利用する場合と比較して、不定期に

利用する場合が平日、土曜日、日曜日と全て多かった。

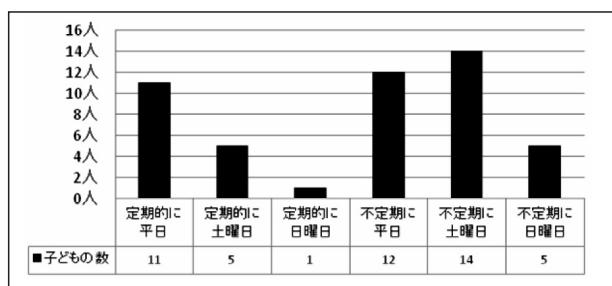


図7 特に対応に困る問題行動のある子どもの長期休業日以外利用人数の内訳

#### 2) 長期休業日以外1か月の利用回数

長期休業以外1か月の利用回数について図8に示す。3～4回の利用回数11人(35%)で最も多かった。

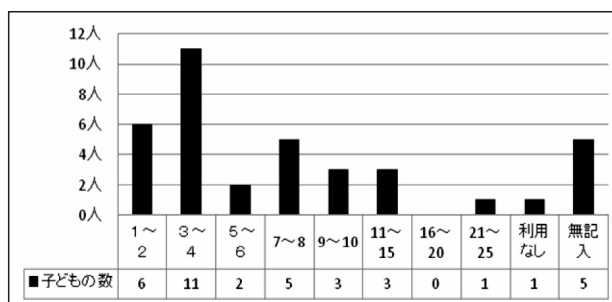


図8 特に対応に困る問題行動のある子どもの長期休業日以外1か月の利用回数

#### 3) 長期休業日以外利用時間

長期休業日以外利用時間について利用した36名について複数回答で得た結果を図9に示す。平日は4時間(13名)、土日は8時間(13名)が一番多い結果となった。

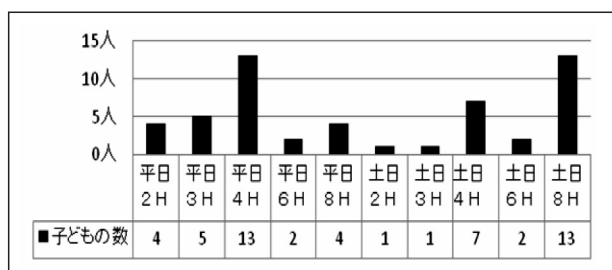


図9 特に対応に困る問題行動のある子どもの長期休業日以外利用時間別の人数

#### 4) 長期休業日の利用の有無

長期休業日は37名中、「利用あり」が32名(86%)、「利用なし」が5名(14%)だった。利用し

ていると答えた32名中、夏季休業日利用者、冬季休業日利用者はそれぞれ31名、春季休業日利用者は30名であった。

### 5) 長期休業日の平均利用日数

利用していると答えた32名について、長期休業日の平均利用回数を図10に示す。夏季休業日10.8日（標準偏差6.7），冬季休業日6日（標準偏差4.5），春季休業日7.3日（標準偏差5.2）だった。

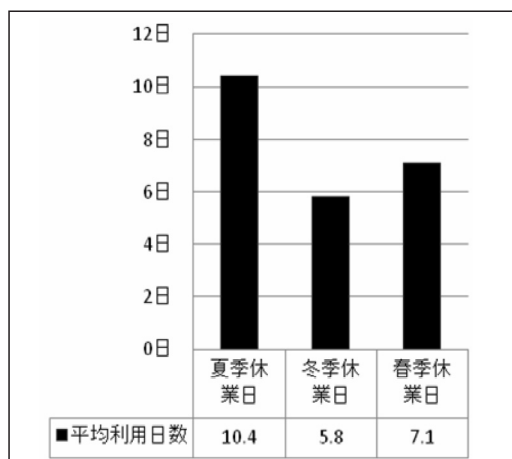


図10 特に対応に困る問題行動のある子どもの長期休業日の平均利用回数

### 6) 長期休業日の利用時間

長期休業日の利用時間を利用のあった32名から無記入2名を除いた30名について図11に示す。長期休業日以外の土日同様で、8時間、17名（55%）の利用時間が最も多かった。

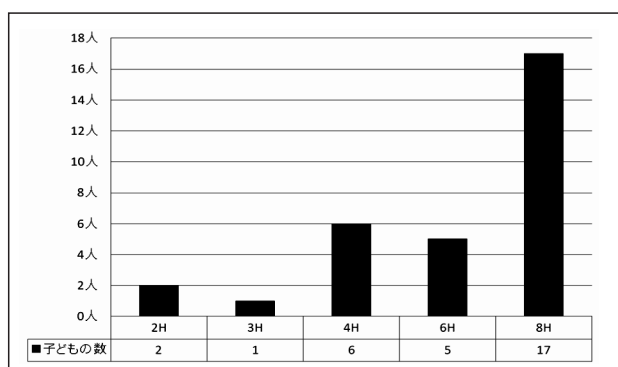


図11 特に対応に困る問題行動のある子どもの長期休業日の利用時間

### (5) 富山型デイサービスにおける、子ども用の決まった活動プランの有無

富山型デイサービスにおける子ども用の決まった活動プランがあると回答したのは、37名中10名（27%），ないと回答したのは27名（73%）で、

プランがなく過ごしている子どもたちが多い結果となった（図12）。また、あると回答した場合の10名の活動プランの具体的な内容を図13で示す（複数回答）。職員が考える決まった活動プランとして食事や排せつなどの身辺処理が4名で最も多かった。続いて多いのは、自由遊びの3名であった。

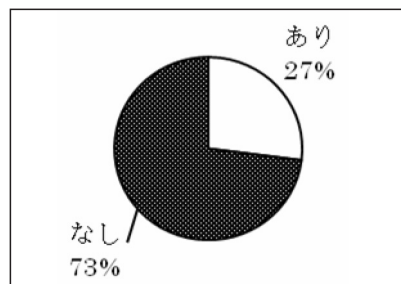


図12 特に対応に困る問題行動のある子どもの活動プランの有無

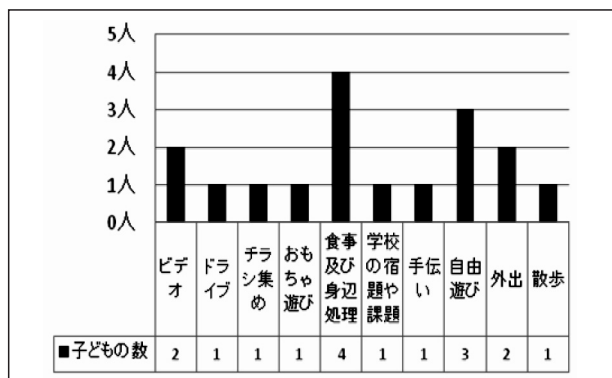


図13 特に対応に困る問題行動のある子どもの活動プランの内容

### (6) 利用時間の主な過ごし方

「職員が付いて一緒に活動する」25名（68%），「本人一人で自由に遊ぶ」8名（22%）「食事，間食など身辺処理に関する活動をする」2名（5%），「無記入」2名（5%），計37名だった。職員が付いて利用時間を過ごすことが全体の7割近くを占め，一番多い結果となった。（図14）

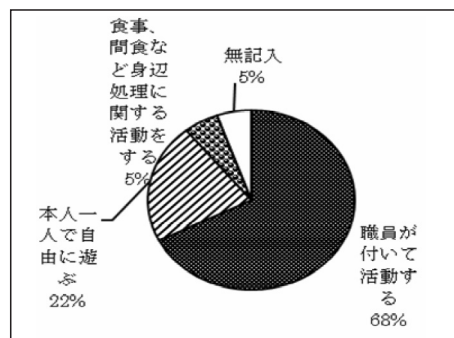


図14 特に対応に困る問題行動のある子どもの利用時間の過ごし方

### 1) 職員が付き一緒にする活動

対応に困る問題行動のある子どもに職員が付き一緒にする活動内容を自由記述による複数回答（25名）から分類・集計し、図15に示す。その結果、散歩が6名で一番多く、次いで、体を使った遊び、外出、感触遊び、食事及び身辺処理などの活動が多かった。

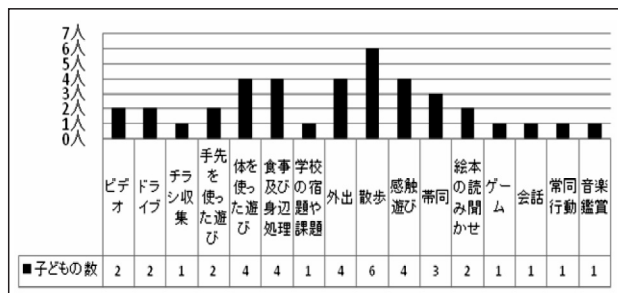


図15 特に対応に困る問題行動のある子どもに職員が付き一緒にする活動

### 2) 本人一人で自由に遊ぶ活動

対応に困る問題行動のある子どもが一人で自由に遊ぶ活動内容を自由記述による複数回答（12名）から分類・集計し、図16に示す。ビデオ、学校の宿題なども活動としてあるが、マスターベーション、つば遊び、飛び跳ねるなど自己刺激遊びが7名で最も多い結果となった。

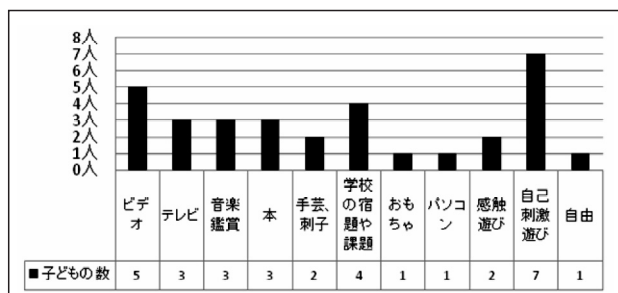


図16 特に対応に困る問題行動のある子ども一人で自由に遊ぶ活動

## 6. 問題行動に関すること

B票で得られた、特に対応に困る問題行動のある子ども37名分の、問題行動自体に関する回答について、以下に詳細を述べる。

### (1) 職員が対応に困る行動形態

上述の37名にみられる複数回答で得た対応に困る行動の形態について、前出の表3で示した、職員が対応に困る16の行動形態の項目ごとに、出現数を図17に示す。一人あたり平均4.4個（標準偏差2.8）の対応に困る行動が出現している結

果となった。また、各行動形態の出現率（対応に困る子どもたち37名を母数とした、行動形態別の子どもの数の百分率）は、5「落ち着かない」21名（57%）、8「こだわりがある」20名（54%）の順で多かった。

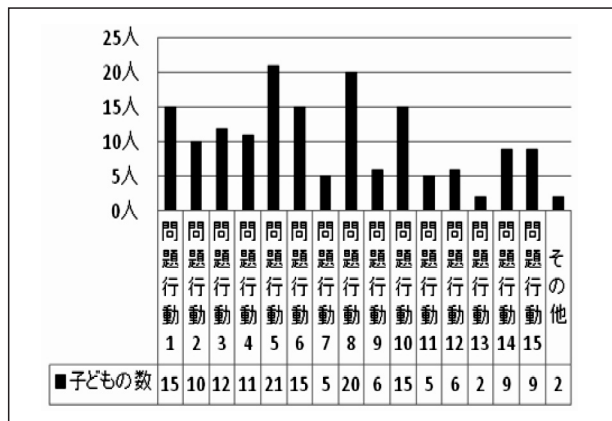


図17 対応に困る行動別の子ども的人数

### (2) 職員が最も対応に困る行動形態

上記(1)で選んだ複数の対応に困る行動形態の中から、職員が最も対応に困るものを1つ選んで回答した結果を図18に示す。各行動の出現率は①3「他人の体をつねったり、叩いたりして傷付ける」9名（24%）、②8「こだわりがある」7名（19%）③1「排泄や食事などの身辺処理面で意思疎通に困難がある」5名（14%）、10「突然どこかへ飛び出す」5名（14%）、の順で多かった。

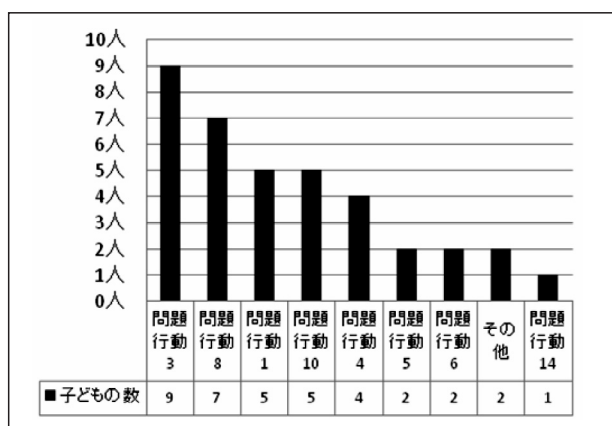


図18 職員が最も対応に困る行動別の人数

### (3) 最も対応に困る行動が起きる頻度

(2)で示した、最も対応に困る行動が起きる頻度を図19に示す。最も対応に困る行動が「利用のたびに起きる」が26名（70%）、「2～3回に1回」が7名（19%）、「それ以外」が3名（8%）



「無記入」が1名(3%)、計37名だった。

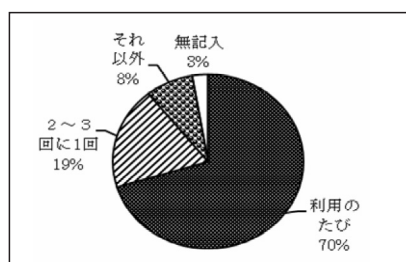


図19 最も対応に困る行動が起きる頻度

#### (4) 最も対応に困る行動が1日に起きる回数

最も対応に困る行動が1日に起きる回数を図20に示す。「1回」が6名(16%)、「2〜3回」が12名(33%)、「それ以上」が17名(46%)、「無記入」が2名(5%)、計37名だった。最も対応に困る行動が1日に4回以上起きている子どもたちが半数近くおり、利用のたびに起こり1日に数回も起きている結果となった。

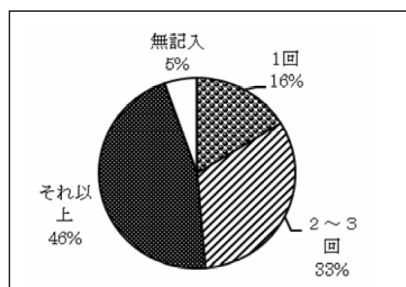


図20 最も対応に困る行動が1日に起きる回数

#### (5) 最も対応に困る行動が起きる状況

自由記述で回答があった、最も対応に困る行動が起きる状況について、KJ法で分類した結果を図21に示す。37名中、6名が無記入だったため31名の記述内容を検討した。その結果、①常時起きる7名(19%)、②突発的に起きる3名(8%)、③問題行動を誘発する対象(人、物)がある時に起きる10名(内4名は職員が手薄な時を見計らう)(27%)、④心身の状態が悪い時に起きる3名(8%)、⑤自分の思い通りにならない時に起きる8名(22%)の5カテゴリーに分類・集計され、③の「問題行動を誘発する対象がある時」が一番多かった。具体的な記述内容は以下のとおりである。①では、「1日中やっているのだからきりめしている」「きっかけがつかめず、いつでも起こる」「特にどんな時ということはない」②では「突然前触れもなく急に行動する」「突然起きる」③では、「外出している時に、興味のある物を見つけ

たら起きる」「食事中にいつも起きる」、④では、「ストレスがたまっている時に起きる」「おなかが減っている、便がでない、お迎えが遅いなどに起きる」「心身状況が悪くなったり、気分が良くて興奮状態になったりした時に起きる」、⑤では、「自分の思い通りにならない時に起きる」「自分の思いが伝わらない時に起きる」「自分の好きなことができない時に起きる」であった。

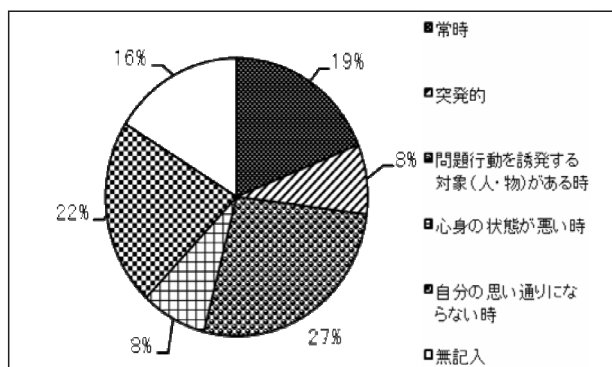


図21 最も対応に困る行動が起きる状況

#### (6) 最も対応に困る行動に対する職員の対応方法

最も対応に困る行動に職員がどのような対応をしているかについて、自由記述の回答をKJ法で分類した。結果を図22に示す。37名中1名が無記入だったため、36名の記述内容について検討したところ、①おさまるまで待つ・ほっておく8名(22%)、②問題行動の原因となる対象を遠ざける7名(19%)、③代償になるものを与える7名(19%)、④言葉で注意する9名(24%)、⑤側に付き、その行動を止める5名(13%)の5カテゴリーに分類・集計され、④の言葉で注意するという対応が一番多かった。具体的な内容は、①では、「そのままにしている」「本人の気の済むのを待つ」②では、「対象と本人との距離をとり経過

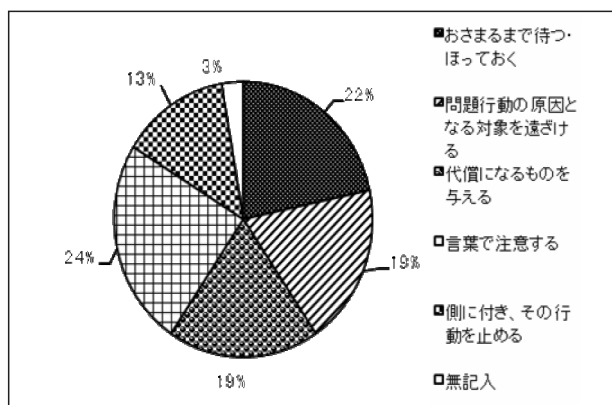


図22 最も対応に困る行動への職員の対応



観察する」「家具などで近付けないようガードする」③では、「本人の好きなことを誘う」「連れ戻し別の遊びを提供する」④では、「言葉で叱る」「言葉で諭す」⑤では、「取りあえず止める」「一緒に行動に同行する」だった。

#### (7) 最も対応に困る行動に対する職員の困惑度

最も対応に困る行動に対する職員の困惑度を図23に示す。「大変困っている」が7名(19%)、「やや困っている」が20名(54%)、「どちらでもない」が3名(8%)、「あまり困っていない」が5名(13%)、「全く困っていない」が1名(3%)、「無記入」が1名(3%)、計37名だった。その行動に対して「大変困っている」と「やや困っている」を合わせると73%だった。「あまり困っていない」と「困っていない」を合わせると16%だった。7割以上が困っている結果となった。

さらに、(2)で示した、最も対応に困る行動の

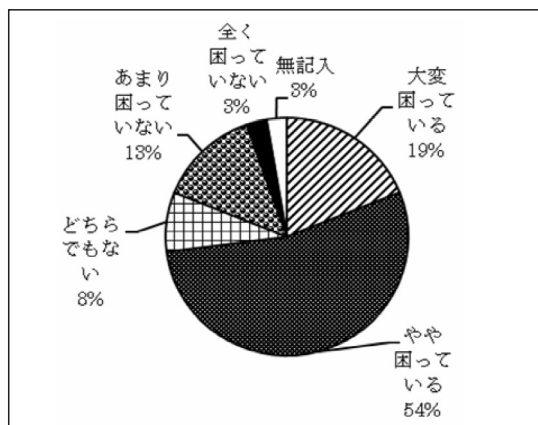


図23 最も対応に困る行動に対する職員の困惑度

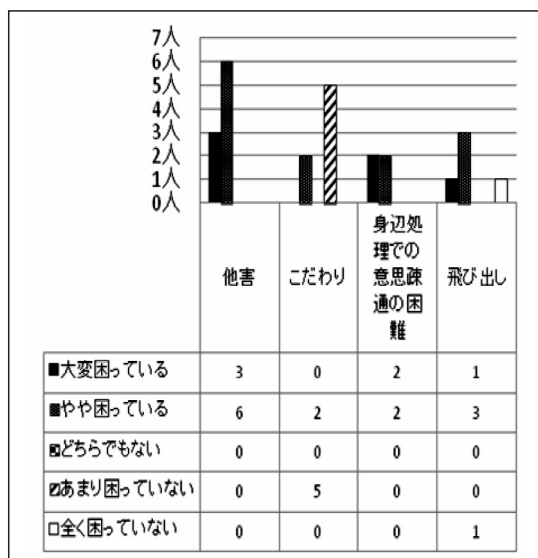


図24 最も対応に困る行動の上位4つに対する職員の困惑度

上位3つ（他害、こだわり、身辺処理面で意思疎通に困難、飛び出し）に関する困惑度を取り出して、図24に示す。「他害」、「身辺処理面で意思疎通に困難」、「飛び出し」ともに、「大変困っている」、「やや困っている」が多いのに対して、「こだわり」については、「あまり困っていない」が一番多かった。

## IV 考 察

### 1. 障害のある子どもの富山型デイサービス利用の現状と問題行動の生起状況について

調査の結果から、富山型デイサービス事業所の約6割で、障害のある子どもたちの利用があり、事業所によって利用者数の多少はあるものの、富山県のいろいろな地域で、障害のある子どもたちが富山型デイサービスを利用しているということが分かった。さらに、利用がある事業所の約7割で問題行動が起きている現状から、障害のある子どもの問題行動は、富山型デイサービスで障害のある子どもを受け入れる際、決して特異なことではなく、どの事業所においても対応すべき課題の1つになっていることが、改めて明らかになった。

今回の調査では、2008年度に富山型デイサービスを利用している障害のある子ども419名における問題行動のある子どもの数は168名で、その出現率は40%であった。今回のアンケートでは、問題行動を「職員が対応に困る行動」と定義したが、富山型デイサービス職員の問題行動の捉え方を示すエピソードとして、アンケートに「問題行動がない」と答えた事業主から「問題行動があっても、私たちはありのままを受け入れている。問題行動として捉えていない。」などの問題行動の定義に関する記述があった。このように、家庭的なサービスを提供する生活の場で、問題行動を改善・低減する必要はなく、そのまま受け入れて子どもたちにかかわるという富山型デイサービスの理念が問題行動の捉え方に影響を与え、回答数にもなんらかの影響を及ぼしている可能性がある。しかしながら、実際に富山型デイサービスを利用する障害のある子どもの40%に問題行動が出現している事実は、その子どもが充実した余暇活動を過ごすためには、看過できないことであるといえる。特に、問題行動のある子どもの数が問題行動のない子どもの数に比べ、特別支援学校中学部

に在籍する子どもで有意に多く、中学校特別支援学級に在籍する子どもで多い有意傾向があったことから、富山型デイサービス事業所にとって、中学生時期の障害のある子どもを受け入れる際、問題行動への対応は避けて通れない課題であると考えられる。

## 2. 特に対応に困る子どもたちの属性について

特に対応に困る子ども37名については、男子が33名と大多数であった。小学生低学年期の子どもが多くなっている(図5)のは、入学に伴って、放課後や長期休業中に富山型デイサービスの利用を新たに開始する時期であり、新しい環境への適応上の課題が影響していることが推測される。障害種別では、自閉症、ADHDなど発達障害と知的障害の子どもたちを合わせると約8割を占めた(図6)。このことから、富山型デイサービス職員が障害のある子どもの問題行動に対応する際には、知的障害や発達障害の障害特性に関する理解と、それに基づく対応方法の習得が必要であると考えられる。

## 3. 特に対応に困る子どもたちの富山型デイサービスの利用状況について

特に対応に困る子ども37名の富山型デイサービスの利用率は、長期休業日以外が97%で、長期休業日の86%より高く、富山型デイサービスで過ごすことが、子どもたちの日常生活の一部となっていることが分かる。また、図7～図11に示すように利用回数、時間など、その利用形態はさまざまである。富山型デイサービスの特徴である地域密着、小規模、多機能というサービス展開が、子どもの保護者ニーズに対応しており(丸山, 2009)、利用したい時に利用したいだけ利用するというやり方で子どもたちの生活、つまり余暇を支えていることが改めて明らかになった。また、特に対応に困る子どもたちの富山型デイサービスの利用時間が、長期休業日や土日で8時間、長期休業中以外の平日で4時間のケースが最も多く、長時間にわたる利用実態が明らかになった。利用時間が長くなればなるほど、問題行動を起こす機会は多くなると考えられ、利用時間の過ごし方に関する検討が必要である。

## 4. 特に対応に困る子どもたちの富山型デイサービスでの過ごし方について

特に対応に困る子ども用の決まった活動プランは

ないと回答した事業所が73%(図12)を占めている。これは、家庭的な雰囲気自由に過ごすという富山型デイサービスの特徴であるといえる。また、決まったプランがあると答えた場合でも、その内容の中心は、食事や排せつなどの身辺処理、自由遊びであり(図13)、実態に応じた計画を予め準備して対応しているとはいえない現状である。このことから、はっきりした活動プランがない中で、長い利用時間を過ごしている子どもたちの実態が明らかになった。このことは、利用時間中に問題行動が起こる促進要因となっている可能性があると思われる。

図14より、特に対応に困る子どもたちの約7割には職員が付いて利用時間を過ごしていることが分かった。このことには、特に対応に困る子どもたちに対しては、問題行動への予防的な対応として、多くの場合、そばに職員が付くという方法を取らざるを得ない背景があると推測される。潤沢に職員がいるわけではない小規模の富山型デイサービス事業所にとって、マンツーマンで職員が付く体制は、運営上負担が大きいと考えられる。実際に、問題行動が顕著なケースでは、受け入れ困難を告げられたエピソードもあった。

特に対応に困る子どもが利用時間に行っている活動内容としては職員が付いている場合は散歩やドライブなど外出が多く、トランポリン、縄跳など体を使った遊びもあり活動的である(図15)。反面、本人一人で過ごす場合は室内での活動が主で、マスターベーション、つば遊び、跳び跳ねるなどの自己刺激遊びが最も多く一人で過ごす活動の種類の少なさが浮き彫りになっている(図16)。

以上のことから、先の3で述べた利用機会の日常化、長時間化の現実と併せ、問題行動の改善・低減のためには、子どもの利用時間と活動内容の構造化を図る必要があると考えられる。問題行動を防いで子どもに充実した内容を提供する場合には、職員の付き添いが必要となり、職員が付かずに対応できる場合には、自己刺激遊びで利用時間を過ごすことが多くなってしまうという現実から、問題行動を起こしがちな子どもが、適切なスケジュール管理の下に、一人でできる活動を自ら行うことができる活動プランを作成し、実行できるように、富山型デイサービスでの支援体制を整えていくことが、今後の課題であるといえる。

## 5. 職員が対応に困る行動形態について

特に対応に困る子ども37人について、職員が対応に困ると答えた行動形態の一人あたりの平均数は4.4であった。今回の調査では、15の行動形態について人数と出現率を比較した(図17)が、その中で「落ち着かない」が一番多く、6割近くの子どもたちにみられる行動形態だった。「こだわりがある」も5割以上の子どもたちにみられた。「こだわり」に関しては、藤原・平澤(2003;前出)の研究においても上位の行動形態となっている。

最も対応に困る行動については、「他人の体をつねったり、叩いたりして傷付ける」が最も多かった。小笠原・守屋(2005;前出)の研究でも「他害」は、問題行動の中で最上位を占めている。「他害」は、後述する職員の困惑度も高く、力の弱い高齢者や乳幼児を障害のある子どもと同じ場で受け入れる富山型デイサービスの職員としては、安全管理の面からも対応に苦慮する行動であることがうかがわれる。

## 6. 最も対応に困る行動の生起状況と職員の対応について

特に対応に困る子ども37人について、職員が捉えた最も対応に困る行動が起きる状況の中では、③「問題行動を誘発する対象(人、物)がある時(27%)」が一番多かった(図21)。「こだわり」が対応に困る行動の上位を占めていることや、自閉症などの発達障害や知的障害の子どもたちが特に対応に困る子どもの80%を占めていることを合わせて考えると、自閉症や知的障害の子どものこだわりという障害特性と、その対象となりやすい物がそのまま置かれている富山型デイサービスの家庭的な環境とがマッチして、問題行動が起きやすい状況を生み出している可能性がうかがわれる。特に民家型の富山型デイサービス事業所では、認知症のある高齢者なども含め、いろいろな利用者が同じ部屋を共有して活動している。そのため、たとえ子どもたちのこだわりの対象(物、人)があっても、職員としては、子どもの事情だけでそれを片付けたり、家庭では見られないような特別な調整を加えたりすることが難しい現状があるためと推測される。

また、「対応に困る行動が常に起きる」、「突発的に起きる」という2つの生起状況を合わせると27%と多くなっており(図21)、職員が問題行動の原因や意味を理解できない状況があると思われる。中

でも、問題行動が「常時」起こっているという回答が19%もあることから、その行動への対応や予防が困難で、結果的に行動を放置する事態になっている可能性が示唆される。

さらに、「自分の思い通りにならない時」という生起状況が22%あり(図21)、子どもたちがコミュニケーション能力の乏しさから正しいコミュニケーション方法で意思を職員に伝えることができず、問題行動を要求手段として使っている可能性が考えられる。加えて「心身の状態が悪い時に起きる」という生起状況も心身の状態をうまく伝えることができないという点で、問題行動がコミュニケーション機能をもった行動であると考えられる。これらについては、Axelrod, S. (1987)の研究と同様の結果が得られたといえる。

特に対応に困る行動に対する職員の対応では、「言葉を用いて注意する」が一番多かった(図22)。適切なコミュニケーション方法を利用できず、問題行動を要求手段として使っている能力の子どもたちにとって、この対応方法では、職員の意図理解が困難である可能性が高いと思われる。また、職員の側も、子どもの問題行動がコミュニケーションの機能をもっていることに気付いていないと推測される。このような双方向のコミュニケーションの不成立があると、たとえ問題行動をその場で一時的に収めることができても、繰り返し起こることを予防することにはつながらないであろう。また、「おさまるまで待つ」、「代償になるものを与える」という対応についても、問題行動のコミュニケーション機能という観点からみると、問題行動の遂行が職員に認められるか、あるいは問題行動を起こすことで子どもにとって都合のよい代償を職員から得ることができるので、実際には問題行動が強化されていると考えられる。最も対応に困る行動が1日に4回以上起きている子どもたちが半数近くいる現状からも、その可能性がうかがわれる。以上のことから、それぞれの子どもがもっている障害の特性やコミュニケーション能力の問題、富山型デイサービスのもつ施設環境の問題、また職員による問題行動の機能や子どもの特質を踏まえた対応の難しさが、子どもの問題行動の生起と維持に関係していることが示唆された。

## 7. 最も対応に困る行動への職員の困惑度

図23から、先に挙げた37名に見られる最も対応



に困る行動に対して8割近くの職員が「困っている」と回答している。

行動形態別にみると(図24)、「他害」が「大変困っている」「やや困っている」のみの回答で、回答数も多く、職員にとって困惑度の高い行動形態といえる。また「身辺処理での意思疎通の困難」「飛び出し」に関しても、回答数は少ないが、「大変困っている」「やや困っている」の回答があり、他害同様、職員にとって困惑度の高い行動形態といえるだろう。一方、最も対応に困る行動として2番目に多かった「こだわり」については、「あまり困っていない」という回答が一番多く、どのように対応して良いかわからない行動ではあるが、職員としては困惑度の低い行動形態であることが分かった。このことは、問題行動への対処の緊急性を反映しているのであろう。他害は、被害が甚大になり、他者への不利益をもたらす可能性の高い行動であり速やかな対応が求められる。身辺処理での意思疎通の困難、飛び出しも利用時の活動に支障をきたし、危険がある。これに対しこだわりは、対応は難しいが、必ずしも被害が出るとは限らないので、対応の優先順位が低く、それに応じて困惑度も低くなっていると思われる。

## V ま と め

調査の結果から、障害のある子どもの多くが地域支援の場である富山型デイサービスを利用しており、その中で多くの問題行動が起きている実態が明らかになった。その背景として、富山型デイサービス特有の環境や利用時間の過ごし方に要因があることが示唆された。富山型デイサービスでは、様々な利用形態での受け入れが可能であり、障害種別を問わず、子どもが住んでいる地域で、家庭のように誰でもいつでも利用できる利点があり、障害のある子どもたちの余暇を支えている。しかし、その多様性がむしろ問題行動を起こす子どもの障害特性に対応した利用環境や活動の構造化を困難にしており、高い利用需要の中で問題行動が起き、職員は、困惑しながら、少ない人員を割いて個別に付くことで支援を続けている。このような現状を踏まえ、問題行動の改善・低減に向けて、富山型デイサービスの良さを生かしつつ、職員にとって無理のない、導入可能な対応策を創出する必要がある。特に、今回の調査では、最も対応に困る行動の生起状況やその行動への職員の対

応から、職員と障害のある子どもたちとのコミュニケーションの課題が示唆されており、具体的な改善策の検討にあたっては、対応に困る行動のある子どもと職員のコミュニケーションの実態についてさらなる調査と分析を進める必要があると考えられる。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、調査実施に快く協力していただいた富山ケアネットワーク事務局、デイサービス事業所の皆様に心から感謝を申し上げます。

## 註

- 1) 富山ケアネットワーク：富山型デイサービスの小規模起業家で構成されている団体

## 参考文献

- Axelrod, S (1987) Functional and structural analysis of behavior: Approaches leading to reduced use of punishment procedures?. Research in Development Disabilities., 8, 165-178.
- 藤原義博・平澤紀子(2003) 知的障害養護学校・特殊学級在籍児の家庭生活に関する調査研究―気になる・困っている行動の生起状況について. 上越教育大学研究紀要, 22(2), 519-527.
- 平野隆之(2005) 共生ケアの営みと支援. 筒井書房.
- 丸山啓史(2009) 障害のある子どもの放課後・休日支援の現状と課題―保護者対象全国調査より. 障害者問題研究, 36(4), 312-319.
- 小笠原恵・守屋光輝(2005) 知的障害児の問題行動に関する調査研究―知的障害養護学校教師への質問紙調査を通して. 発達障害研究, 27(2) 137-146
- 小澤温・高橋彰彦・渡辺 勸持・大島正彦・島田博祐(1999) 通所施設に通う障害児の問題行動に対する保護者と職員の困難感の相違. 発達障害研究, 21(1), 76-85.
- 惣万佳代子(2002)「富山型」デイサービスの日々 笑顔の大家族このゆびとーまれ. 水書房.
- 富山県民間デイサービス連絡協議会(2003) 富山から始まった共生ケアお年寄りも子どもも障害者もいっしょ. 筒井書房.

(2009年11月20日受付)

(2009年12月22日受理)